

『眠り姫の憂鬱と』

かつて子供だった守り人たち』

く夢見る魔法の覚める時く

※注意※

初見でのホラー的な恐怖や、ミステリ的な驚きが欲しい方は、
読まない方がいいかもしれません。

女性キャラの台詞をチェックしたい場合は「偽オーリ」で文書検索をかける
と出てきます。

女性ボイスのオフトラックを制作するのはトラック7です。
拷問シーンはトラック8です。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

1 ■キャラ設定
2 ●パストル
3 ・33歳
4 ・175センチ
5 ・55キロ
6
7 有能な医者だが、偏屈と神経質と傲慢と横柄の権化のような性格をしてお
8 り、口も態度も非常に悪い。
9 誰も好きにならないし、誰かに好かれないとも思っていない。
10 いつもイライラしているしちよつとしたことですぐに癇癪を起こす。
11 幼いころに両親に馬車から突き落とされて捨てられたところを、ヒロインに
12 助けられて孤児院に保護された。
13 自己肯定感が低く、自分是谁にも愛されないという幻想の中で生きている。
14 ヒロインが目覚めたときに自分が死んでいたらショックを受けるかもしれない
15 いな……という気持ちだけで今まで生きてきた。
16 世界の何もかもが嫌いヒロインだけが好き。
17 本質的には八歳の少年のままで、自分がヒロインより年上になることを拒否
18 するあまり、肉体的成長を厭って十八歳で摂食障害になった。
19 ヒロインには常に甘えたいし、甘やかしてほしいと思っているが、その思い
20 が異常である自覚がある。
21 高貴で孤高で気まぐれで攻撃的なくせに、甘えたがりの猫のような存在。
22
23
24 ●ヒロイン
25 ・身長155くらい やせ型
26 ・17歳
27
28 二十五年間眠り続けた夢の少女。
29 本名は別にあるが、親しい人からは「オーリ」と呼ばれている。
30 元孤児院の職員で、かつて子供だった四人のヤンデレに執着されている。
31 日本出身だが、五歳のころにこちらの世界に迷い込む。
32 十七歳で一度日本への帰還に成功しているが、ヤンデレ共の執着が強すぎて
33 二十五年後に日本から引っぱり戻された。
34 眠り姫シリーズ第1作で孤児院長ヴィスクから逃げ出し、第2作でハーラン
35 に監禁凌辱されたが、無事逃げだしてパストルに保護された。
36

●トラック1 小さな魔術師

ヒロインが眠って十年が経過している。
パストルは十八歳。
ついにヒロインの年齢を超えてしまったことに、内心ひどく動揺している。

場所…寝室

時間…日中

【絵本の朗読】

【3 枕元】

パストル「昔々、あるところに、決して目を覚まさないお姫様がいました。
お姫様は眠っている間、少しも歳をとらなかつたのですが、
周りの人々はどんどん歳を取っていきます。
困った王様は、お触れを出しました。
“姫を目覚めさせた者に、姫との結婚を許す”と」

SE 本綴じ

【うんざりと、ため息交じりの失笑】

パストル「——ひどい話だよな、これ」

【穏やかに】

パストル「なあ、覚えてるか？ 十年前……俺がまだ八歳だったころ、
はじめてこの絵本を読んでもらったとき、

俺、こう言ったんだ。

“もし嫌いな人に起こされちゃったら、

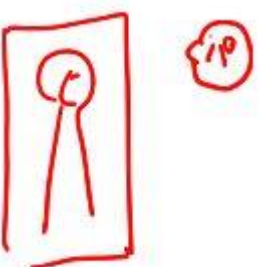
そいつと結婚しなきゃいけないお姫様がかわいそう”って。

そしたらオーリは笑って、すごく笑って……

“大丈夫。結婚したくないなって思ったら、

お姫様はお城を逃げ出して、

本当に好きな人を探しに行くはずだから”って」



1 パストル「俺、それがすごくうれしくてさ。
2 二人でいろんな、眠り姫のその後の話を作ったよな。
3 俺のお気に入り、城から逃げ出したお姫様が、
4 森で孤独な魔法使いに出会って、幸せになる話」

5
6 パストル「でも魔法使いには秘密があって、実はお姫様を眠らせたのは、
7 その魔法使いなんだ。

8 ある時、お姫様に秘密がバレて――。

9 【自嘲ぎみに】そこから先の話が、全然うまく作れない。

10 十年もたったのに、少しも……

11 オーリが一緒じゃないと、俺、何も上手くできないから……」

12
13 【何気ない調子で突然話題を変える】

14 パストル「俺、こんど手術を受けるんだ。

15 頭のおかしい医者が出てさ。

16 精神の治療に役立つ義眼を作ったから、

17 誰かに移植したいんだって。

18 人の頭のなかをいじれるんだってさ、その義眼で。

19 ——魔法みたいだろ？」

20
21 パストル「その義眼を使えば、

22 オーリを起こせるかもしれないって言われてさ。

23 頭はおかしいけど、腕はいいんだ、そいつ。

24 こんな俺を孤児院からひきとって、育てて、医者にしてくれた。

25 だからまあ……いいかなって。実験台になるくらい、さ」

26
27 パストル「義眼の色は、好きに決められるんだって。

28 ちょっと悩んだ。

29 ヴィスクみたいな黒もいいし、ハーランみたいな青もいい。

30 オーリと同じ色にするのもいいなって。

31 でも、結局変えないことにした。

32 俺はこの赤い目が嫌いだけど……オーリが綺麗だって

33 言ってくれた目の色だから」

1 パストル「ヴィスクには言ってるよ。

2 反対するに決まってる。

3 あいつには、俺がまだ八歳のガキに見えてるんだ。

4 今日だって、痩せすぎだからもっとちゃんと食えっとうるさくて。

5 “オーリに釣り合う大人になれ”なんて……」

6
7 パストル「バカだよ……オーリが俺たちに優しくしたのは、

8 俺たちが子供だったからなのに。

9 大人になった俺たちなんて、オーリにとっては“知らない誰か”で
10 しかないのに……」

11
12 【不安と恐怖で涙をこらえ切れず】

13 パストル「俺、怖いよ……！」

14 オーリより大人になるのが怖い……！

15 大人の男になんてなりたくないのに、

16 体はどんどん大きくなるし……！」

17
18 パストル「なんで俺を置いていったの？

19 オーリのいない世界なんて、生きててつらいだけなのに。

20 “僕”も一緒に眠りたかったよ……お姉ちゃん」

●トラック2 ある記録

トラック1から十五年後。
パストル33歳。
すっかり嘆き疲れて厭世を極め、神経質で他人を顧みない、傲慢で不遜でふてぶてしい中年に成長を遂げている。
独白のため通常マイク使用。

SE 万年筆を紙に走らせる音ずっと流す。

パストル【深呼吸】——患者1号の記録。
俺の最初の患者だが、今日からカルテを新たにする」

パストル「二十五年前、花のトゲに刺されたことをきっかけに昏睡に陥り、以降人形のように肉体の時を止めた少女だが、先日、覚醒を確認した。
覚醒の理由は不明。
患者1号の昔なじみである、グロウ・ベスクリフが遠方より持ち帰った、怪しげな呪術をその理由として見ることもできるが、再現性を確認できない以上、長期的な観察が必要だろう。
患者1号を当院で一時預かり、健康状態を確認したのち、患者1号が幼少期を過ごしたイスクム司祭院にて経過観察。
しかし問題が発生し、患者1号が逃走。
保護を失い、暴漢に拉致監禁されていた患者1号を救助し、再度当院に収監した。
——まったく、役に立たないクズどもが。
患者1号の容体は安定。
本日より記憶の調整に入る」

SE ストップ

パストル「……大丈夫。俺はあいつらとは違う。
俺は彼女を傷つけない。
俺は彼女を怖がらせない。
大丈夫、大丈夫だ……」

●トラック3 甘くない男

暴漢に拉致監禁され、精神的に追い詰められたヒロインの記憶を「最初の日の朝」に改ざんするパストル。
ヒロインが過度に自分に依存しないよう、あえて冷ややかで突き放した話し方をする。

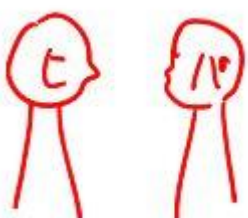
場所…病室

時間…朝

【1 至近距離】

パストル「俺の目を見る。

指を弾いたら、お前は二十五年の眠りから覚めたばかりで、
その後に起きたことは何も覚えていない。
だが状況はすべて理解し、受け入れていて、気分は穏やかで、
何も怖いことはない。
——お休み、オーリ」



SE：指をはじく音

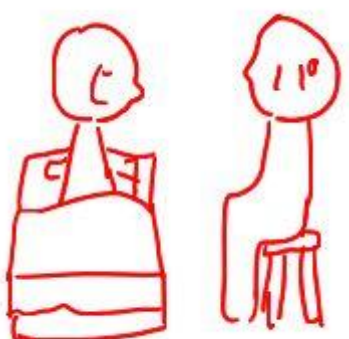
SE 飛び起きる。

【ベッドサイドの椅子に腰を下ろし、ヒロインを見ているパストル。
ヒロインは何が起ったのか分からず、きよんとしている】

【3】

パストル「——目が覚めたか。気分はどうだ？

まだ、少しぼーっとするだろう。
俺はお前の担当医で、この病院の——」



【ヒロイン、パストルに顔を向け、名前を呼ぶ】

【1 言い当てられたことに驚き、動揺を隠すように、慎重に】
パストル「……そう。院長のパストルだ」

【ヒロイン「昔、私の膝に乗ってた、あの小さなパストル？」】

1
2 【突き放すように】

3 パストル「ああ、その小さなパストルだ。

4 孤児院の図書室で、いつも一人で本を読んでいた、
5 笑わない図書室の幽霊に、ほかに心当たりがないならな」
6

7 【ヒロイン「うわあ、懐かしいね！」】
8

9 パストル「俺は別に懐かしくない。
10

11 お前が眠っていた二十五年間、
12

13 俺はしょっちゅうお前の様子を見てたんだからな。
14

15 だがお前には、夢の中で過ごした二十五年の記憶があるんだろう？
16 職員から話は聞ける。
17

18 だったら、お前にとって俺は二十五年ぶりというわけだ。
19

20 八歳のころの面影なんてほとんど残ってないのに、
21 よく俺だとわかったな」
22

23 【ヒロイン「だって、昔のままだもん】
24

25 パストル【失笑】本気で俺が昔のままに見えるなら、目の検査が必要だな」
26

27 【ヒロイン、パストルの髪に触れる】
28

29 パストル「おい、触るな！」
30

31 SE 振り払う
32

33 パストル【少し慌てて】あ……違う、怒ったんじゃない。
34

35 悪かった。振り払ったりして。
36

ただ……【ため息】。

急に触るから、少し驚いて……。

大人の男の髪に触れる意味が分からないわけじゃないだろ？」

【ヒロイン「でも、パストルは家族みたいなものだし……】
34
35
36

1 パストル「お前にとって俺が家族でも、俺にとってはもう違う。
2 子供じゃないんだ。

3 お前に対して、男として欲望を抱くこともある」

4
5 【「嘘だあ」と笑うヒロインに、少し機嫌を損ねる。パストル】

6
7 パストル「……そんなにおかしいか？

8 俺がお前を抱きたいと思うのは」

9
10 【ヒロイン「だって、想像できないよ】

11
12 パストル【深いため息】もういい。これ以上話すことはない」

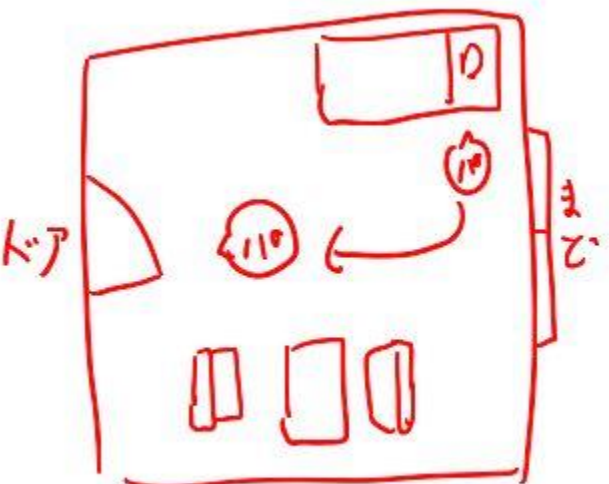
13
14 SE 立ち上がる

15
16 パストル「治療が済み次第、お前は別の病院に転院させる。

17 自分の身が可愛いなら、可能な限り俺には近づかないことだ」

18
19 SE：去る足音

20
21 SE：ドア開閉



●トラック4 お菓子のフルコース

入院二日目くらい。
病院の中庭でなんとなく本を読んでいると、会ったことのない女の子がヒロインを「オーリ」と呼んでお使いを頼む。
言われるままに院長室に行ってみると、パストルの拒食症が判明し、ヒロインはどうにかパストルに食事をとらせようと努力することに。

時間…昼

SE…中庭のざわめき

SE 足音が正面で止まる

【9】

偽オーリ「——オーリ？ ねえ、あなたオーリでしょ？

えー！ すごーい！ 見ない顔だから新人だよね？

なのに、パストルの理想にぴったり合わせてきてるじゃない！」

【ヒロイン、初対面の女の子にびっくりする】

【1 ぐいと距離をつめる】

偽オーリ「っていうか、ちょうどよかった！

パストルのところにお昼ご飯持ってかなきやいけないんだけど、

私急用ができちゃって……！ 代わりに行ってもらっていい？

はいこれ！」

SE 紙袋押し付けられる

【1↓9 最後のセリフ言いながら背を向ける】

偽オーリ「ほんとごめんだけど、あの人、

時間に遅れると一口も食べなくなるから、急いでね！

前回遅れた時なんて、

それから一週間も絶食しちゃって大変だったんだから。

ちゃんと食べるとこ確認してね！ じゃあ、よろしく！」

SE 走り去る足音

間



1 SE…ヒロインの足音フェードイン

3 【院長室に向かうヒロイン】

5 SE…ノックノック

6 間

7 SE…ノックノックノックノック

8 SE…花瓶の割れる音

9 SE…そつとドアを開ける

11 【6】

12 パストル【「ぶっきらぼうに」遅い。もういい、食う気が失せた。出ていけ」

14 【ヒロイン「今の音は？」】

16 パストル「聞こえなかったのか!? 出ていッ——オーリ!?

17 なんてお前が……!」

19 SE 椅子から立ち上がる

21 【パストル、ヒロインが持っている紙袋を目にとめ、動揺する】

23 パストル「その紙袋……もしかして、俺の……?」

25 【ヒロイン「うん、お昼ごはんだった」】

27 パストル「誰に頼まれて……」

28 【イライラと】紙袋をそこにおいて、部屋から出ていけ」

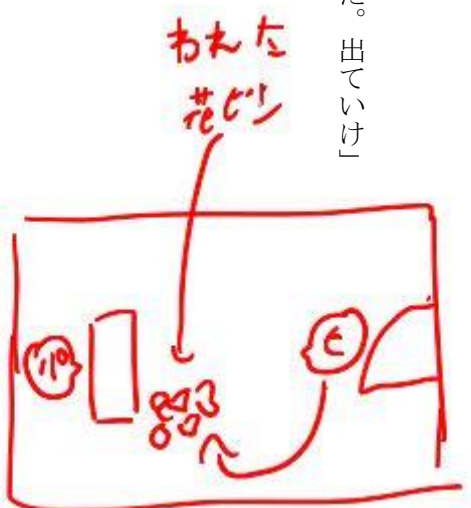
30 SE 後ろ手にドアを閉める

31 SE ヒロインの足音

33 パストル「おい、なんで入ってくるんだ!

34 出て行けって言っただろ!？」

36 SE 割れた花瓶片付ける音



1 パストル「よせ、片付けなくていい……！」
2
3 なぁ、危ないから……！」
4

5 SE 駆け寄ってくる足音

6 SE ヒロインの手首つかむ
7

8 【3】

9 パストル「話を聞けって！」
10

11 なんて俺の言う事が聞けないんだ……！」
12

13 大体、オーリなら花瓶を片付けるより先に、
14 俺のことちゃんと……ッ」
15

16 パストル【不安げに】ちゃんと、心配しなきゃ……ダメだろ……？」
17

18 【ヒロイン「……どういう意味？」】
19

20 パストル「……ッ！ 何でもない。忘れていい。
21

22 【深いため息】。ほら、どけよ。花瓶、片付けるから」
23

24 SE 花瓶を片付ける音

25 SE ゴミ箱にばさー
26

27 【6】

28 パストル「これで満足か？ もういいだろ、出ていけ」
29

30 【ヒロイン「でも、お昼ご飯は？」】
31

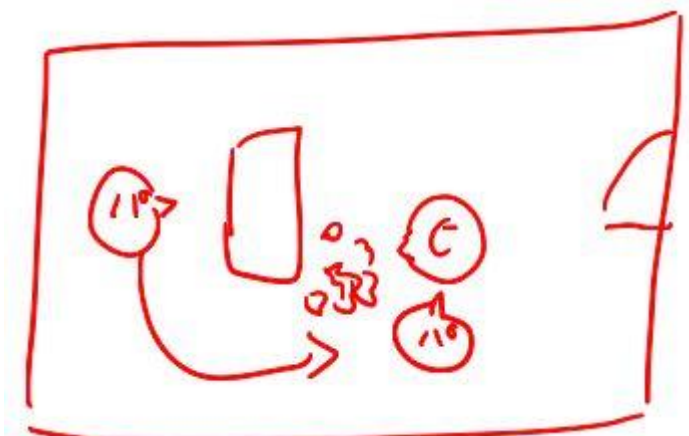
32 パストル「お前が出て行ったら、ちゃんと食べるから！
33

34 いいからもう放っておいてくれよ！
35

36 お姉ちゃ——んぐっ！【言いかけて言葉を飲み込む】
37

38 【ヒロイン「……今お姉ちゃんって呼んだ？」】
39

40 パストル「うるさい。そんな呼び方してない」
41



1 【ヒロイン「お姉ちゃんと一緒にお昼食べる？」】
2
3 パストル「お前はお姉ちゃんなんかじゃないし、一緒に昼飯なんて食べない！
4 なぁ、この前ちゃんと説明したよな？
5 俺に近づいたら危ないって！
6 分からないのか？ 俺が我慢してるって！
7 本当は俺だって……ッ！ 【弱々しく】俺だって、本当は……」
8
9 【つつけどんに】
10 パストル「……それ食べたら、部屋に戻るんだな？」
11
12 【ヒロイン、うなづく】
13
14 SE ヒロインから離れる足音
15
16 【6】
17 パストル【「ため息を吐きながらソファに乱暴に座る」】
18
19 SE ソファがどしゃつと軋む音
20
21
22 パストル「ほら、それ渡せ」
23
24 SE ヒロインの足音
25 SE 紙袋がさがぐ
26
27 パストル「……座らないのか？」
28
29 SE 正面のソファに向かうヒロインの足音
30
31 【14】
32 パストル【「慌てて」あ、そっちじゃない」
33
34 SE 足音ストップ
35
36 【呼び止められ、振り向くヒロイン】

1 【6】
2 パストル「向かいじゃなくて……ここ。俺の隣」
3

4 【ヒロイン「どうして？」】
5

6 パストル【困惑】どうしてって……。
7

8 【イライラと】オーリはそうしないとダメなんだ……！」
9

10 【ヒロイン、首を傾げながらパストルの隣に座る】
11

12 SE 軽めに座る音
13

14 【7】
15

16 パストル【少しほっとして】うん、そう。そこでいい。
17

18 袋の中身？ ああ、クッキーだよ。
19

20 気に入ってる店があつて、今はそのしか食べない」
21

22 【ヒロイン「お昼ご飯がクッキーなの？」】
23

24 パストル「別に、昼飯がクッキーでもいいだろ？
25

26 朝食に甘いパンを食うのと大して変わらない。
27

28 栄養なんて、基本的に薬でどうにでもできるし……」
29

30 SE 紙袋ガサガサ
31

32 【1 隣り合って顔だけ向き合う距離】
33

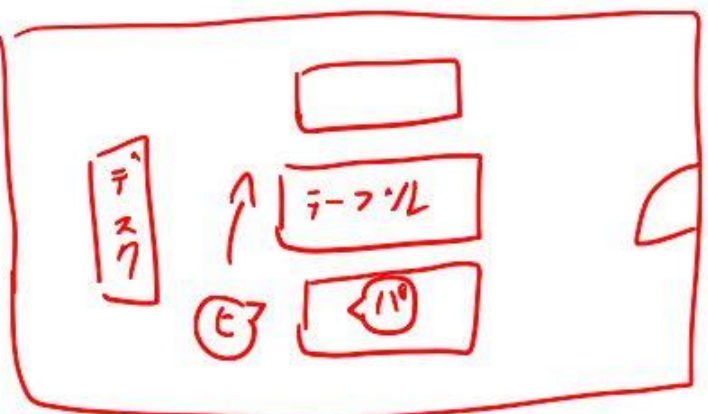
34 パストル「……なんだよ。そんなにじっと見て」
35

36 【ヒロイン「食べるところ確認しろって言われてて」】
37

38 パストル「確認って……【不機嫌になって】そんなに見られてたら、
39

40 逆に食う気が失せる」
41

42 【心配そうなヒロインだが、パストルにはこの表情が「情けないヤツ」という
43 失望の表情に見える】
44



1 パストル「なんだよ、その情けない顔。オーリはそんな顔しない」

2
3 【ヒロイン「今まさにしてるんだけど……」】

4
5 【顔を背けて】

6 パストル「別に珍しくもないだろ？ 拒食症なんて。

7 【不安そうに】……がっかりしたか？

8 俺がこんな大人になってて……」

9
10 【ヒロインに心配してもらい、ちよつと元氣を取り戻すパストル】

11
12 【再びヒロインを見て】

13 パストル「へえ？ 心配してくれるのか。献身的なことだな。

14 さすがはお姉ちゃんだ。

15 まあ、そうだな。

16 オーリが隣でうまそうに食べてたら、俺も食欲がわくかも」

17
18 SE 紙袋ヒロインに押し付ける

19
20 パストル「ほら、食べて。

21 口開けて。あーんって」

22
23 【ヒロイン、言われるままに食べる】

24
25 SE やぐやぐ

26
27 パストル「美味しい？ ほら、もう一枚」

28
29 【ヒロイン「パストルも食べなきゃ」】

30
31 パストル「俺はまだいいから。ほら食べて」

32
33 SE さぐさぐ

34
35 パストル「飲み込まないで、そのまま【デープキスになだれ込む】」

1 【パストル、ヒロインの口の中のクッキーをしばしむさぼる。ヒロインはびっ
2 くりして抵抗できない】

3
4 パストル「うん。甘くて、美味しい……。
5 ねえ、もう一枚ちょうだい。
6 口開けて……かんで、柔らかくして。俺のために。
7 そうしたら、俺も食べられるから」

8
9 S E さくさく

10
11 パストル【キスしながら】ん……ちゅ……
12 もっと……舌絡めて、ちゃんと。
13 ほら、舌、逃げるなって……！
14 下手くそだな……ん、んん……」

15
16 【ヒロインの口からクッキーが無くなってもキスをやめないパストル。30秒
17 程度してから、名残惜しむようにキスを終える】

18
19 【3 耳元 ヒロインからの拒絶に怯えながら】
20 パストル「俺が今、何考えてるか……わかるか？
21 このまま……お前のことめちやくちゃに犯して、
22 俺だけのにしたって、そればかり考えてる。
23 俺が怖いだろ？ 逃げ出したいくらい、気持ち悪いだろ？」

24
25 【ヒロイン「私のことが好きなの？」】

26
27 【1】
28 パストル「ああ、好きだとも。今更聞くのか？
29 八歳の孤独な少年にとって、十七歳の少女は女神のごとくだ。
30 眠り続けるお前の年齢を超えたとき、
31 俺はひどく自分自身をいびつに感じた」

【1】

パストル「――そのクッキー、お前と似た年恰好の女に渡されたんだろ？」

この病院では、ああいう女を何人か雇ってるんだ。

役職は何だと思う？ “オーリ”だよ。

俺はお前の代用品を仕立て上げて、自分の世話を焼かせてる。

そのうえ――」

【3耳元で 脅すように囁く】

パストル「夜にはオーリどもを部屋に呼んで手ひどく犯す」

SE ヒロイン飛びのく

【1 少し離れて】

パストル「これでわかっただろ？ 俺と二人きりになるのは危険だって。

さっきのキスは勉強代だ。

これ以上のことをされたくないかったら、

誰に頼まれたとしても、二度と俺に近づくな」

●トラック5 お望みの関係

その夜、職員に懇願されて、パストルの部屋に来るヒロイン。
到着すると、部屋の中から飛んでもない大さわぎが聞こえる。

SE 大量の食器が割れたりひっくり変える音

【16 ドアの向こう かなり遠くから】

パストル「出ていけ！ 出ていけ！ 出ていけ！

誰も俺の部屋に近づくな！ お前らなんか知らない！
知らない、知らない！」

SE ドア開閉

SE バタバタと走り去る人々

【1】

偽オーリ「あ、あなた……！ よかったあ！ 来てくれて！

あなたが本物のオーリなんだって？

今日は本当に機嫌が悪くて、私たちがもう手が付けられないの。
このままじゃ、パストルは自分で自分を傷つけちゃう！」

【6 背後に回って背中おす】

偽オーリ「お願い、なんとかだめてあげて……！」

SE 足音

【9 ドアの向こうから】

パストル「すすり泣きながら」これじゃない……

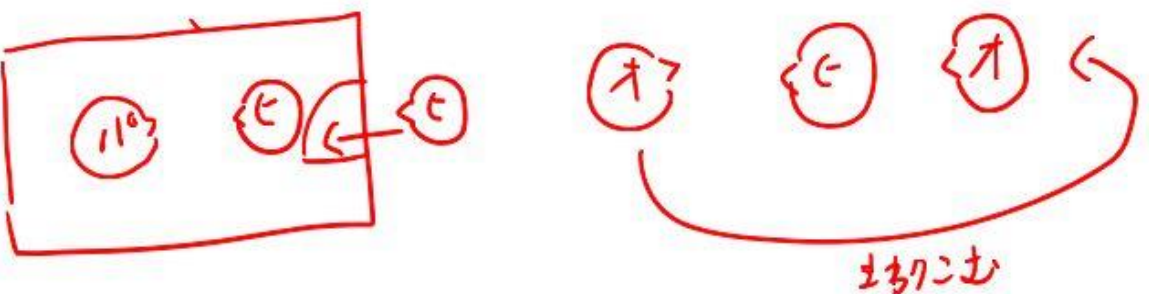
俺が欲しいのは、これじゃない……これじゃない……」

SE ドア開閉

SE 足音

パストル「はっとして」オーリ……？ なんで……」

【癇癪を起しているところをオーリに見られたことへの気まずさと、恥ずかし
さと、無力感と苛立ちで攻撃的になるパストル】



1 パストル「また病院の連中に頼まれたのか？」

2 院長が夕食を召し上がらないんですとか何とか言われて？

3 あれほど俺に近づくなど言っただろう！

4 そんなに俺に犯されたいのか!？」

5 【ヒロイン「パストルがそれで食べてくれるなら、いいよ」】

6 パストル「なっ……んで……そんなの……【急に弱気に】いいわけないだろう？」

7 これ以上、俺をみじめにさせないでくれ。

8 俺の事なんか放っておけ……!!

9 勝手に狂ってるだけなんだから、お前には関係ない……!!」

10 【ヒロイン「でも……」】

11 パストル「でも——なんだ？」

12 S E 近づいてくる足音

13 S E 壁ドン

14 【9↓1 至近距離】

15 パストル「放っておけないか？ 俺のことが大切だから？」

16 違うよな……オーリは誰にでも優しい。

17 目の前で苦しんでるやつがいたら、

18 誰が相手でも、なんだって差し出すんだ!」

19 【ヒロイン「違うよ……」】

20 パストル「違うないだろ!？」

21 子供のころからそうだったもんな。

22 俺と二人で過ごしてても、ほかの連中に呼ばれたら、

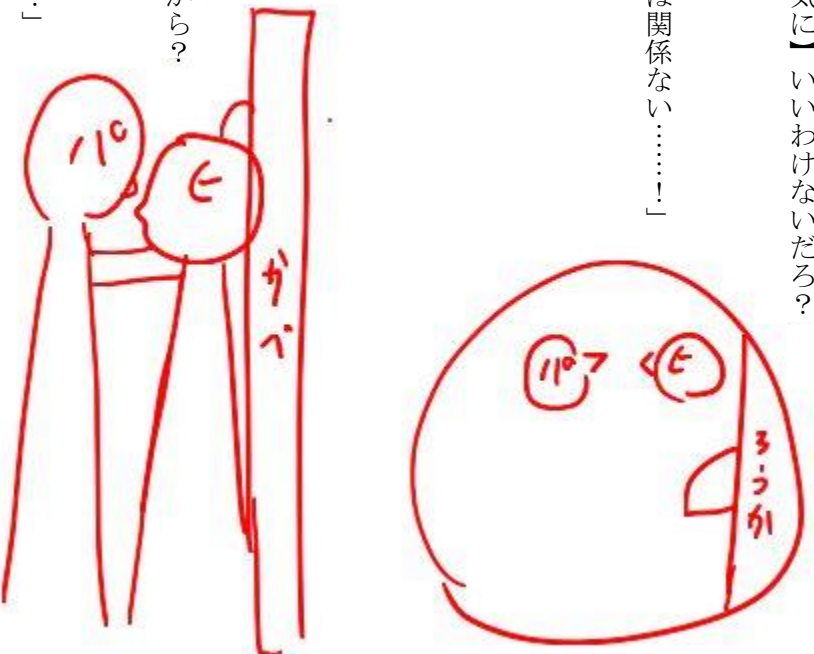
23 お前は俺を置いて行った。

24 俺にはお前しかいなかったのに……お前しかいないのに、

25 お前にとって俺は、大勢いる孤児院の子供たちの一人でしかない。

26 気にかけてるふりなんてやめてくれ。

27 俺のことなんて、少しも愛してないくせに……!!」



パストルの部屋は円形の塔の上って設定
があります。まあ設定があるだけなんですけ
ど。

【パストル、しばし呼吸を整える】

【1】

パストル「急に泣く」……来てほしくなかった。

わかってる……オーリが悪いんじゃない。

でも、自分を抑えられないんだ……！

どうして、こんな……

【うつむき。両手で顔を覆って】

オーリにはこんなところ、見られたくなかったのに……！」

【ヒロイン、パストルを抱きしめる】

SE 衣擦れ

【3】

パストル「ッ……おい、何を……！」

SE 身じろぎ

パストル「オーリ、離れろ。」

こんな風に抱きしめられたら……期待するだろ？

俺のこと、大切に思ってくれてるのかもって……」

【ヒロイン「大切だよ」】

パストル「違う……違うよ、違う……」

俺が欲しいのはその『大切』じゃない。

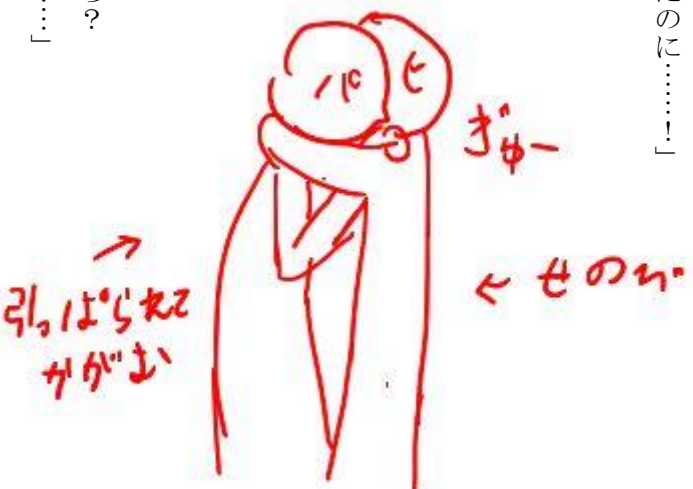
わかるだろ……？

【子供のように】わかってて、知らないふりしてる？

俺のこと、男としては見れない……？ 見てくれない？

ねえ、俺、どうしたらオーリの男になれる？」

【ヒロイン「ちゃんと食事するとか？」】



1 【1】
2 パストル「【困惑】食事……？ それだけ？
3 それだけでいいのか？ほんとに？
4 後悔……しないか？」
5

6 【ヒロイン「しないよ」】
7

8 パストル「【少し明るく】食べるよ、ちゃんと。
9 オーリと一緒に食べられる。
10 明日の朝、一緒に食べよう。
11 だから……だからさ……」
12

13 パストル「【不安】部屋に戻らないでっていったら……いてくれる？
14 朝まで……」ここで……俺と……」
15

16 【ヒロイン「いいよ」】
17

18 パストル「ほんとに？ なあ、意味、ちゃんと分かてるんだよね？
19 俺に抱かれてもいいって……そういうこと、だよな？」
20

21 【ヒロイン、うなづく】
22

23 【パストルは、ヒロインは自分に恋愛感情を抱いていないが、過去の絆によっ
24 てその体を差し出そうとしてくれることに気づいてる。それが辛く悲しいが、
25 差し出された甘いお菓子を拒絶できない】
26

27 【1 至近距離】
28

28 パストル「……キス、していい？」
29

30 【ヒロイン「いいよ」】
31

32 【浅めのキスから喋りながらだんだん深いキスに】
33 パストル「ちゅ……ん……好き……好きだ、好き……
34 お姉ちゃん、お姉ちゃん……ん、んう……。」
35

36 【三十秒ほどデープキス】



【7 軽く耳にキスしながら】
パストル「ねえ、ベッド行こう。」

いいよ、風呂なんて。俺はもう済ませてあるし、
オーリのおい……大好きなんだ。
ほら、こっち……」

SE ベッドまで移動

SE ベッドの軋み

【ベッドに横たわるヒロインに覆いかぶさる】

【1】

パストル「服、俺が脱がせていい？」

SE ブラウス脱がす（ボタン）

SE スカート脱がす（紐で結ぶタイプ）

SE ベッドの上で人間が動く程度の軋み

【1 少し離れてヒロインの体を眺める】

パストル「きれいだ……本当に、昔のまま……

思い出すな……。

小さいころ、一緒に風呂に入ってた。

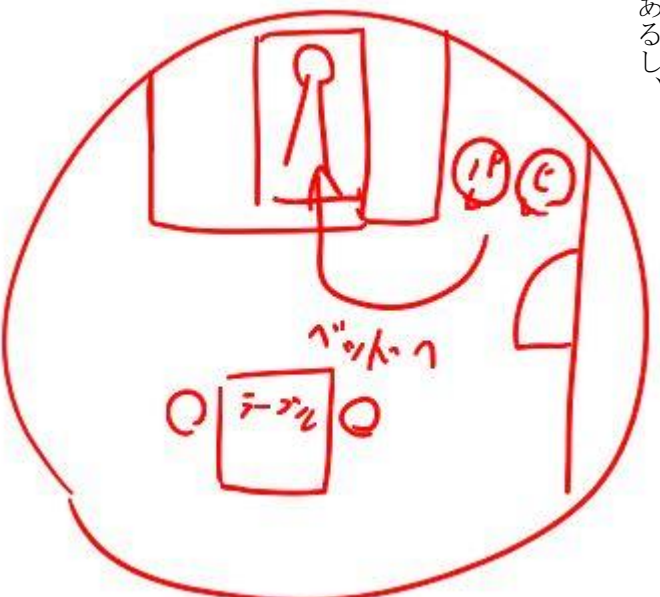
初めて見る女の人の体に……ドキドキした。

あったかくて、柔らかくて……独占したかった。

でも、嫌われるのが怖くて、我儘も言えなくて……」

【あらためてヒロインにのしかかるパストル】

SE ベッドの軋み



【3 至近距離】

パストル「緊張してる？ はじめてだもんな、こういうの。」

俺も、すごいドキドキしてる。

大丈夫、優しくするから。

胸、触るからな？ ここ、ほら……

優しくなでてから、きゅってすると——な？ 気持ちいい」

パストル「かわいい声……かわいい……かわいい、かわいい……

どうされるのがいい？ どうされたい？

俺に教えて。オーリがしてほしいこと、俺が全部してあげる」

SE くすぐったがるヒロインの身じろぎ

パストル「ん……？ どうしたの？ 耳、くすぐったい？

そっか、耳、弱いんだな。

知ってる？ 耳って性感帯なんだ。【息吹きかける】。

ほら、ぞくってしただろ？

ねえ……試してみようか。耳だけでイけるかどうか」

【耳舐め三十秒程度 合間に「好き」と「かわいい」織り交ぜる】

SE ヒロインもがく

【1】

パストル「んー？ 無理そう？ だめ？

そっか。じゃあ、ちゃんと気持ちいいところ、触ってあげる。

足、開いて」

SE 体勢かえるベッドの軋み

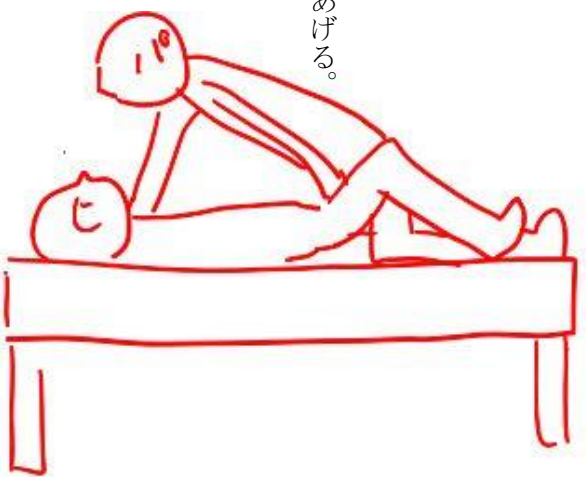
SE 水音

パストル「ああ——あふれてくる。

指、入れるよ。

緊張しないで……痛かったらすぐやめるから」

SE 水音 ゆっくりめにねちねち



【7 至近距離】

パストル「ほら、痛くないだろ？」

わかる？ 俺がこうやって耳元でしゃべると、
中の方がきゅって締まるんだ」

【クスクス笑いながら】

パストル「ちがうよ。面白がってるわけじゃない。

嬉しいんだ。

演技じゃなくて、本当に気持ちよくなってくれてるんだって、
わかるから」

【十秒ほど耳にキスしながら穏やかな吐息】

パストル「もうイキそう？ いいよ、イクとこ見せて。

俺の指で、俺の声で、俺の体で気持ちよくなるとこ見せて。
かわいい、かわいい、かわいい……ッ」

SE ベッド強めに軋む

SE 水音ここまで

【自分にしがみついて果てたヒロインを見て、初めて優越感に近い庇護欲を感じ、優しい心が芽生えるパストル】

パストル【限界に優しく】ああ……よしよし。

ほら、はじめてだけど、上手にイケた。

大丈夫？ いたくなかった？

よかった……これからもっと気持ちよくしてあげる。

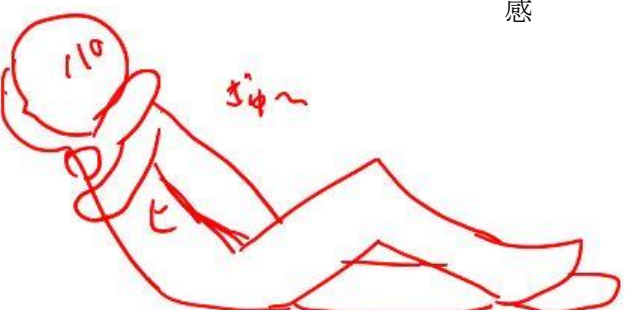
二人で気持ちよくなろう？ ね？」

パストル「ほら、俺の首に腕回して。ぎゅーって。

【甘やかすような囁き】好きって言ってて。俺のこと、ずっと」

SE 触れ合うだけの水音

【ゆっくりヒロインに挿入するパストル】



1 パストル「ゆっくり息を吐いて、ゆっくり……あ、は……ッ……」

3 S E 挿入音

5 【1↓3】

6 パストル「軽くこらえながら」ほら……な？

7 分かるか？ 中に、少しずつ入ってく。

8 ああ……あったかい……きもちい……

9 あ、あ……お姉ちゃん……お姉ちゃん……ッ」

11 S E 軽めに肉を打つ音 いきなりちよい早めで B P M 120くらい

13 【ぎりぎり聞こえるくらいの声で、うわごとのように】

14 パストル「好き、好き、好き……愛してる……あ、ああ……

15 だめだよ……そんなに締めたら……すぐ……

16 だめ、だめ……きもちい……あ、ああ……ッ！」

18 【切羽詰まって必死に我慢する感じの呼吸 秒数お任せします 次のセリフ終
19 わりでフィニッシュ】

21 【3】

22 パストル「う、あ……も、いく……！ いきそ……ッ

23 一緒に……な？ 一緒にいこ？ 一緒に、一緒に……

24 あ、ああ……あ……！ 【フィニッシュ】

26 【処女童貞同士が初体験終わりに抱きしめ合うような空気の事後】

28 【3 あまり情感込めすぎず、自然な感じで】

29 パストル「はあ……はあ……はあ……

30 【ふと笑って】ああ……俺、幸せだ。

31 死なくてよかった。

32 諦めなくて、本当によかった……」

34 【ヒロイン「大げさだよ」

1 【1】

2 パストル「大げさなんかじゃない。

3 世界の全部を手に入れた気分なんだ。

4 今まで空っぽだったところが、今はもうはちきれそうで……

5 失いたくなくて、怖くなる」

7 【ヒロイン「大丈夫、傍にいるよ」】

9 パストル「……ほんと？ ずっとそばにいてくれる？

10 誰のところにも……いけない？

11 俺だけのオーリになつてくれる？」

13 【ヒロイン「いいよ。なつてあげる」】

15 パストル「や、約束だからな……!？」

16 俺、ほんとに信じて【ヒロインにキスされて黙る】」

18 【十秒ほどデープキス】

20 パストル「はぁ……あー……このまま、ずっとキスしたい。

21 朝までずっと、このまま……ずっと……。

22 愛してる……愛してる……愛してる……」

●トラック6 ひとかけらの真実

なんとなくパストルと恋人関係になった気がするヒロイン。
穏やかな日々を送っていたが、急に病室の窓を見知らぬ青年にノックされる。
青年はヒロインが記憶を操作されているといい、待ち合わせ場所に来てくれれば証拠を見せられるとヒロインを説得する。
なんとなく記憶にひっかかりを覚えたヒロインは青年の指定した場所に行くが、そこにはパストルが待っており、「ほかの男の場所に行こうとするんだな」とヒロインを責め、強姦する。

時刻…夜

場所…病室

SE 窓をノック

SE ヒロインの小走り

SE 急いで窓開ける

【急に窓が開いて、落ちそうになるマルス】

SE 木の枝ガサガサ

【9】

マルス「うわ……と！ 危ない危ない！

そんなに勢いよく窓開けたら、落っこちちゃいますよ……！

ここ二階なんですから……！

よ……とー！

SE 窓から部屋に入る

SE 後ろ手に窓閉める

【9】

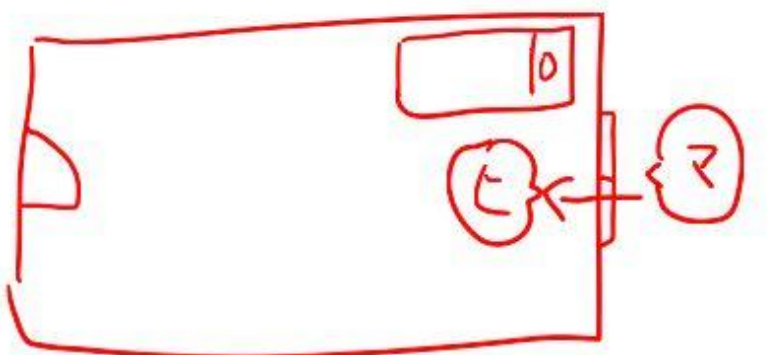
マルス「あ、びっくりしました？ ですよねえー！

でもよかった、元気そうで。

オーリさんがいなくなつて、こっちは大変だったんですよ？

親方は泣き叫んで使い物にならないわ、

ヴィスクさんは親方がオーリさんを隠してると思ってるわ……」



1 【ヒロイン「あの……誰ですか？」

2
3 マルス「え？ 誰って……怒ってるのはわかりますけど、
4 それはさすがにキツツイですよ！
5 せっかく助けに来たのに……」

6
7 【ヒロイン「助けにつて……？」

8
9 マルス【困惑】……本当に覚えてないんですか？
10 もしかして、パストル院長に記憶いじられてます？」

11
12 【ヒロイン「記憶をいじる……？」

13
14 マルス「パストル院長は、人の記憶を消せるんですよ。
15 忘れたい記憶を消して、心を整える治療とか何とかいって、
16 金持ち連中には重宝されてるみたいですけど……
17 だから普段、ベールで両目を隠してるでしょ？」

18
19 マルス「まいったなあ……じゃあ、本当に俺が誰かわからないんですか？
20 ヴィスクさんのことも、ハーラン親方のことも？
21 それで……パストル院長にとって都合のいい記憶だけ残して、
22 ずっとここにいろつてことですか？ 何か月も？」

23
24 【ヒロイン「まだ起きて一週間くらいしかたつてないけど……」

25
26 マルス「一週間つて……何言ってるんですか！？
27 オーリさんが親方のところから逃げ出して、もう一ヶ月は経ってる！
28 ここにいるほとんどの時間の記憶を消されてるつてことですか？
29 冗談だろ……そこまでやるのかよ、あの人……」

30
31 マルス「ここから逃げましょう。

32 親方もマトモじゃないけど、パストル院長よりはマシです。
33 後のことは、とにかくここを出てから考えればいい」

34
35 SE ドアの間口から近づいてくる足音

1 マルス「げ……誰か来る……！」

2 とにかく明日、この手紙の部屋に来てください」

3
4 SE 手紙ガサガサ

6 【9 言いながらヒロインに背を向ける】

7 マルス「俺と親方で、どうにかしてオーリさんをここから逃がしますから。

8 細かいことは全部手紙に書いてあるんで……それじゃあ！」

10 SE 窓開ける

11 SE 木の枝ガサガサ

12 SE 走り去る足音

13 SE ノックノック

14 SE ドア開く

16 【13】

17 パストル「……どうしたんだ？ 窓なんて開けて。

18 季節を考えろ。寒いだろ？」

20 【ヒロイン「そっちこそどうしたの？ こんな時間に」】

22 【6】

23 パストル「……いけないか？ こんな時間に、恋人の部屋を訪ねたら。

24 やつと仕事が落ち着いたんだ。

25 少し甘えさせてくれてもいいだろ？」

27 SE ドア閉める

28 SE 近づいてくる足音

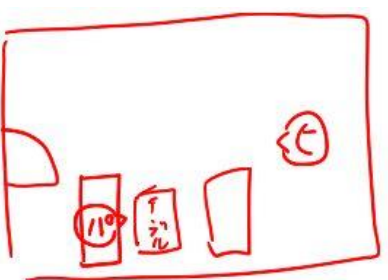
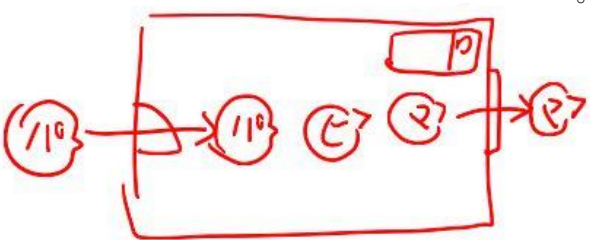
29 SE ソファに座る

31 【10】

32 パストル「ほら、隣に座って。膝枕。早く」

34 SE ヒロインの足音

35 SE ソファに座る



1 【1 下がりながら】
2 パストル「ふー……つかれた」
3

4 【ヒロインの膝に倒れこむパストル】
5

6 【1 下から見上げる】
7

8 パストル「……何かあった？ 元気ないな」
9

10 【ヒロイン「何か忘れてる気がして」】
11

12 パストル「ふーん……？」
13

14 まあ、オーリは結構忘れん坊だからな。
15 思い出せないなら、どうせ大した記憶じゃない」
16

17 【ヒロイン「でも……」】
18

19 パストル「しい……オーリ。俺の目を見て。」
20

21 SE パチン、と指をはじく音
22

23 【きょんとするヒロイン】
24

25 パストル【クスクス笑いながら】……っはは！ 間抜け面。
26

27 何でもないよ。
28

29 ちよつと指を鳴らしただけだ。
30

31 ショックで何か思い出すかもって思っ
32

33 SE 立て続けに二回ほど指を鳴らす
34

35 パストル「昔から、ずっと思ってたんだ。
36

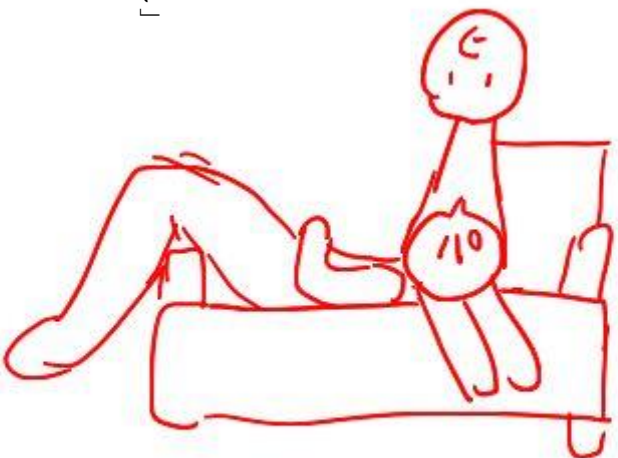
指を鳴らせば魔法みたいに、
37

何でも思い通りになればいいのに……って。
38

ほら、小さいころ読んでくれた、眠り姫の絵本。
39

森の魔法使いが出てきてただろ？」
40

【ヒロイン「何か、思い通りにならないことがあるの？」】
41



1 パストル「思い通りになんて、ならないことだらけだよ。
2
3 自分で決めたことすら守れない。
4 絶対にあいつらみたいにはならないって、決めてたのに……」
5

6 【ヒロイン「あいつらって……？」】
7

8 パストル「いいんだよ、わからなくて。
9

10 誰のことかも、何のことかも……わからなくていいんだ。
11 俺のことだけ見てればいい。
12

13 ———ねえ、キスして。【軽いキス】
14

15 パストル「ありがとう。
16

17 愛してるよ、オーリ。愛してる。
18

19 “それだけは”ほんとだから……それだけは……」
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

●トラック7 夢見る魔法の覚めるとき

マルスがくれた手紙に従い、ヒロインが待ち合わせ場所に向かうと外からドアを閉められ、中ではパストルが待っている。
自分が記憶を操作され、パストルが描いた筋書き通りに動くように仕組まれていたことに気づき、絶望するヒロインを激情に任せて強姦するパストル。

時刻…夜

【マルスが指定した部屋に向かって走るヒロイン】

SE 廊下を走る

SE そっとドアを開ける

SE 部屋の中をゆっくり歩く

【15 やや遠くから】

パストル「——マルスを探してるなら、ここにはこないぞ」

SE ヒロイン、驚く

【ヒロイン「どうしてここに？」】

パストル「どうして……？」

さあ……どうしてかな」

SE 近づいてくる足音

【1 至近距離】

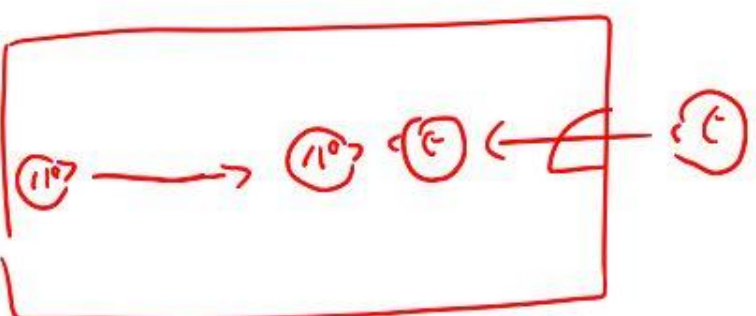
パストル「なあ……オーリは、どうしてだと思っ？」

SE ヒロインの背後でドアがボタン

SE 鍵ガチャン

SE 慌ててドアに飛びつくヒロイン

SE ドアを叩く



【1 ドアの間こうから、からかうように】
偽オーリ「はーい残念でしたあ！」

このドアはあ、パストルが開けろって言うまで開きませーん」

【取り乱すヒロインを、背後からそつとなだめるパストル】

【4 背後から耳元に】

パストル「甘えるように」 しい……落ち着いて、大丈夫だから。

そんな風に怖がらないでくれ。

俺たち、恋人同士だろ？ な？」

【ヒロイン「どうして閉じ込めるの？」】

【4↓1 最後のセリフでヒロインを自分の方に向かせる】

パストル「どうして……だって、閉じ込めないと逃げるから。

逃げたら治療ができないだろ？

ほら、こっち向いて。俺の目を見て。」

SE もがくヒロイン

【ヒロイン、目をつむる】

パストル「焦れて」なんで目、閉じるんだよ……！

俺の目見るの、嫌？

目を合わせたくないくらい、俺が嫌い？

【苦笑】……そうだな。

でなきゃ、こんなに何度も、何度も、

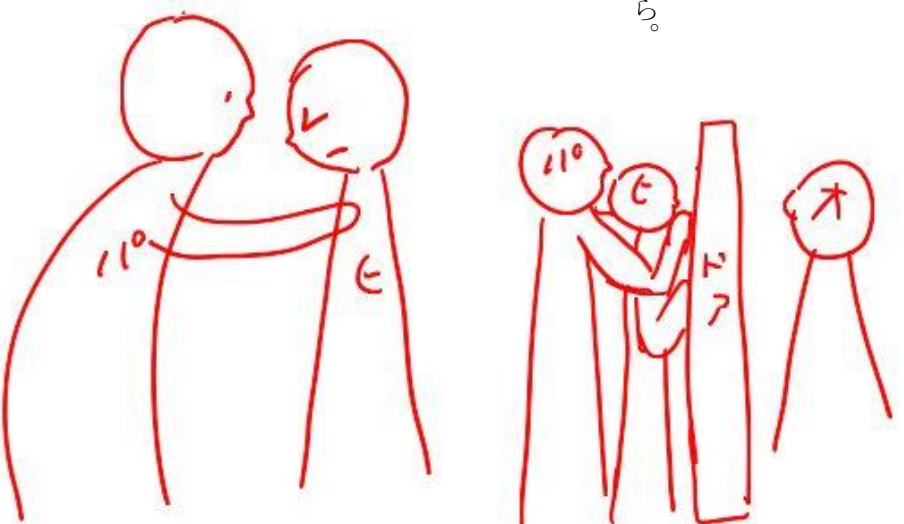
俺のところから逃げようとなんてしないよな……」

【ヒロイン「何度も？」】

パストル「そう……何度もだ。

お前が俺から逃げ出そうとしたのが、

これで何度目か教えてやろうか？」



1 【3 耳元でささやく】
2 パストル「ちようど十回だよ。輝かしい記念日だな」
3

4 【2】
5 パストル「ずっとそばにいて約束したのに。
6 信じたのに……信じたかったのに……。
7 何度やり直しても、お前は俺を捨てようとするんだ」
8

9 パストル「お前に愛されるためになんでもやった。
10 お前が逃げ出すたびに、どこで間違えたのか必死に考えて、
11 やり直して、機嫌を取って……。
12 今回は上手く行ってた。一度も失敗しなかったのに……！」
13

14 【1 涙をこらえるように】
15 パストル「なのにお前はまた、
16 ハーランに呼ばれたからって、
17 俺のところから逃げようとするんだな。
18 だったら最初から、クッキーなんて欲しなかった……！
19 キスなんてしてほしくなかった！
20 抱きしめてほしくなんてなかった！」
21

22 【冷やかに 責めるように】
23 パストル「憐憫と、自己犠牲。
24 傲慢に、冷酷さ。」
25

26 それがお前の病気だ。
27 お前は他人を哀れまずにられない。
28 そのくせ他人の依存を受け入れずに突き放す。
29 哀れな人間に希望を与えて、希望を奪って、壊すのは楽しいか？」
30

31 【ヒロイン「そんなことしてない……！」】

32 パストル「してるだろう!? してるんだよ……！
33 【甘く】——でも、それでもいいよ。
34 俺はどうせ壊れてるから……最初から壊れてるから」
35
36

【1】

パストル「俺は平気だ。

もう一度やり直すよ。何度でも、何度でも。

これも、明日の朝には忘れてる……ちゃんと忘れさせる……
なかったことにするから、だから……」

SE 服ビリビリ破く

【悲鳴を上げ、暴れるヒロイン】

SE 必死に暴れもがく

※黄色いライン部分、ボイスオフ版作ります

【13 ドアの向こう】

偽オーリ「おおげさにさわがないで。

大丈夫、気持ちよくしてもらえるから。

あーあ、許されるなら代わりたあい」

【3 ヒロインの背後に向かって】

パストル「黙ってる！ オーリはそんなこと言わない！」

【13 ドアの向こう】

偽オーリ「あははは！

【優しいお姉さんのように】「ごめんねパストル。

ごめんなさい。怒らないで、いい子だから」

【1】

パストル「【苛立って】くそっ……あいつら……！」

【機嫌を取って】「ごめんな、オーリ。

あいつら、あとでちゃんと叱っておくから」

パストル「暴れないで……！」

ほら、キスしよう？ な？

ん……ちゅ……【抑え込むようなデープキス】」

1 【13 ドアの向こう】
2 偽オーリ「みんな、しい……！ キスしてるみたい……！」
3

4 【1 唇にキスしながら】
5 パストル「俺はハーランみたいにひどくしない。
6 優しくするよ。

7 オーリが嫌なら、俺は入れなくたっていいんだ。
8 オーリが俺の指で感じてくれたら……
9 泣いて、乱れて、甘い声を聞かせてくれたら……」
10

11 【13 ドアの向こう】
12 偽オーリ「それを私たちが真似しまーす」
13

14 S E ドアを殴る
15

16 パストル「いちいち口を出すな！
17 うるさいって言ってるだろ！」
18

19 【13 ドアの向こう】
20 偽オーリ「はぁーい（クスクス笑い）」
21

22 パストル「ベッドに行こう。
23 立ったままじゃ嫌だろ？」
24

25 【ヒロイン、無言で首を左右にふる】
26

27 パストル「ベッドは嫌？
28

29 俺に優しくされたくない？
30 ドアの外の連中に、可愛い声、聞かせてやりたい？
31 じゃあ、このままここで、立ったまま……
32 キスしてあげる。体全部に【うなじあたりにキス】」
33

34 SE もぐぐ
35
36

【1 やや下から】
パストル「胸にキスしたり舐めたりしながら」
泣かないでオーリ。泣かないで。
気持ちいいだろ？
乳首も硬くなってきた」

【1 やや下から】
パストル「胸にキスしたり舐めたりしながら」
ここ、こうやってしゃぶられながら、
爪で引っかかれるの、好きだもんな？
震えてる……胸だけでイキそう？
いいよ、イかせてあげる。
意地悪しないよ、オーリにだけは」

【しばし胸舐める 秒数お任せします】

【膝が震え、今にもへたり込みそうなヒロインに気づくパストル】

【1↓3】
パストル「ん……？ もう立ってるの辛い？
ほら、俺の首に腕回して。転んだら危ないから」

SE 衣擦れ

【3 耳嚙んだり舐めたりしながら】
パストル「もどかしい？ 早く中に欲しい？
大丈夫、言わなくていいよ。全部わかってるから」

SE シェルト外す

パストル「ほら、足上げて」

SE 入り口にあてがう水音



【3 少し離れて】

パストル「うわ……あーあ、これ……ぬるぬるで……」

ちよっと力入れたら、すぐ奥まではいっちゃいそう」

SE 身じろぎ

【3 至近距离】

パストル「しい、しいー……いい子だから、暴れないで。

ちよっとだけ我慢してて、すぐ終わらせるから

力抜いて。ゆっくり。ゆっくり……」

【押し入る】あ、ああ……!」

【ほのぼの和姦の時より顕著に感度が上がってるヒロインに気づき、自分の中で作り上げていたヒロイン像との差異を実感して苦笑するパストル】

パストル「中……すごい締まる。

ああ……これ……あっはは……ああ、そうか……

こんな風に無理矢理されるの、好きなんだ」

SE 出し入れする水音&肉を打つ音 BPM110くらいのテンションで

【出し入れしつつ】

パストル「オーリの体が、覚えてるんだ……」

俺のじゃない、あいつらの体、あいつらの形……!

はあ、はあ……あ、ああ……くそ、くそ……!

俺のだ……俺の、俺の……!

誰にもやらない……誰にも、誰にも……!」

【三十秒ほど、耳元で吐息のみ 段々テンション上げる感じで】

SE 出し入れする水音&肉を打つ音 BPM130くらいのテンションで

【3 泣きつつ 耳元で】

パストル「ごめんオーリ……ごめん、ごめん……！」

好きだよ、好き……ほんとに好き……

あ、ああ……ぎゅってして……ぎゅうって……

爪立てて、俺に……血が出るくらい強く……そう、ああ……！

えぐって、そのまま……愛してる……愛してる……！

あ、ああ……いきそ……もう……あ、は……っああ……！

ああ……あ、ああ……！【フィニッシュ】

【しばし呼吸整えるパストル かたくなに目を閉じ続けているヒロインの姿に心の痛みを感じつつ】

【1】

パストル「……まだ、目をつむってるんだな。

忘れたくない？ 俺に犯されたこと、覚えていたい？

ここから逃げ出したい気持ちを忘れないために？

……そう。そうか……うん……いいよ、それでも。

オーリがそうしたいならしょうがない」

SE 身支度を整えるパストル

【9 ヒロインの手を引いて、離れつつ】

パストル「でも、もし本当に忘れないつもりでいるなら、

知っておかなくちゃいけないものがある。

——おいで。俺の秘密を見せてあげる」

SE ドア開く

SE 足音フェードアウト

●トラック8 新しい魔法

病室↓地下室へ移動

SE 足音（地下室）

【9 ヒロインの前に立って歩きながら】

パストル「この地下室は俺の研究室になってるんだ。

一週間くらい前に、粹のいい検体が手に入ってきた」

SE カギ開ける

SE 重々しい鉄扉開く

SE 鎖の音

【12 ヒロインを中に促しつつ】

パストル「紹介するよ。検体のマルスだ」

【6】

マルス【怯えて】助けて……助けてください……

お願いですから、ここから出して……ッ……」

SE ヒロイン怯えて後ずさる

【6 背後耳元】

パストル「こいつが助けに来たの、昨日だと思ってたか？

一週間前だよ、本当は。

この一週間は忙しくてさ、少し寝不足くらいなんだ。

病院への侵入経路を聞き出したり、

手首を切り落としてハーランに送ったり、

切り落とした手首を再生させたり。

オーリも何度もここにきてる。

もちろん覚えてないだろうけど」

SE パストルがマルスに近づく足音

SE 鎖の音

【9】

マルス「い……嫌だ、くるな……もう嫌だ……！」

もう嫌だ！ オーリさん、やめさせてください！

お願いします、お願いしますから……！」

【9】

パストル「俺の許可なくオーリに話しかけるなって、言っておいたよな？
罰を与える。——爪をはがすぞ。まず小指だ」

SE ぐり

マルス「ぎゃあああああー！」

パストル「二回しゃべったから、もう一枚はがす」

マルス「いやだ、いやだ、いやだ……！」

パストル「親方のハーランを恨むんだな。

俺がどういう男か分かったはずなのに、

あいつはお前をここに送り込んだんだから——なっ【はがす】」

SE ぐり

【叫んでから泣く】

マルス「うわああああ！ あ、ああ……ふ、う……ひぐ……うう……」

【ヒロイン「やめてー！」

SE パストルに体当たりするヒロイン

【1 腕に飛びついたヒロインを見つつ】

パストル「おっと……！ 急に飛びつくなよオーリ。危ないだろ？」

【ヒロイン「どうしてこんなことするの……！？」】



【1 マルスを見ながら】

パストル「どうしてって……復讐だよ。」

ハーランはオーリに薬を盛って、監禁して犯し続けた。

マルスはオーリの世話役兼見張り役。

だが、「つまみ食い」くらいはしたらしい。

憶測じゃない。オーリが全部俺に教えてくれた。

ひどい記憶だろう？ だから俺が忘れさせたんだ。

なのにこいつはこのこ病院に現れて、

オーリを連れ去ろうとした。

どうだ？ 目玉くらいえぐり出してやりたくなったか？

ならない？ そうか。まあ、拷問なんて別に楽しくもないしな」

【ヒロインを抱き寄せるパストル】

【4 ヒロインを後ろから抱きすくめながら】

パストル「正直、俺もそろそろ飽きてきた。

だからこの検体を処分しようと思うんだが……

どう処分するのがいいと思う？

もしオーリが望むなら、傷を全部綺麗に治して、

苦しかった記憶も消して、

ハーランのところに帰してやることもできる」

【ヒロイン「それがいい！ そうしてあげて！」】

【4 耳にキスしながら】

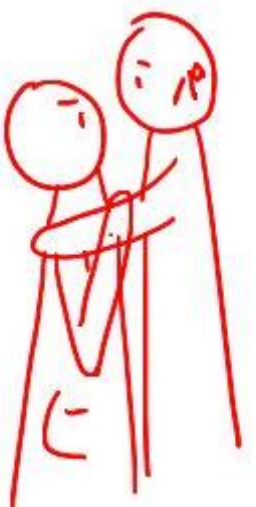
パストル「いいよ。オーリが全部忘れて、

もう一度俺と最初からやり直してくれるなら、

こいつのことも助けてやる」

SE パストルの腕の中で方向転換

【ヒロイン、まっすぐパストルの目を見る】



【1】

パストル「少しも迷わないんだな。」

誰かを守るためなら、本当に……

お前はなんだって差し出すんだ。

好きでもない男に、心も体も全部……」

パストル【独り言】誰にでも差し出すなら……俺でもいいよな……

誰でもいいなら……俺が一番……」

【1】

パストル「オーリ、俺の目を見て。」

指を弾いたら、マルスにが来る前の病室で目が覚める。

そのあとに起こったことは何も覚えてない。

——お休み、俺の眠り姫」

SE：指をはじく音

●トラック9 ハッピーエンド

すっかりパストルの恋人として出来上がったヒロイン。
毎日なんの疑問もなくパストルと幸せに過ごしているだけのエピローグ。

時刻…夜

場所…寝室

【7 耳元でささやく寝物語】

パストル「——なあ。昔、二人で絵本の続きを考えて遊んだだろ。

あれの結末を、最近ずっと考えてたんだ。

魔術師の悪事がお姫様にばれたあとの話。

お姫様は怒って、魔術師から逃げようとした。

だから魔術師はお姫様をもう一度眠らせて、

自分の屋敷に閉じ込めることにしたんだ。

魔術師は幸せだった。

お姫様の寝顔を毎日見られて、本当に幸せだった。

でも二度と、お姫様の本当の笑顔は見られない。

それが悲しくて……悲しくて……」

パストル「だめ？ こんな展開、気に入らない？

じゃあ、オーリならどうする？

お姫様は魔術師を許して、

二人は末長く一緒にくらしました……とか？

【くすくす】やっぱりな。

ほんと……そうなればよかったのにな……」

パストル「大丈夫、お姫様はきっと幸せな夢を見てるから。

悲しいのは魔術師だけ。

だからこれはハッピーエンドだ。

これ以上ないハッピーエンドだよ。

だって今、オーリは幸せだろう？

うん……俺も幸せ。

愛してるよ。俺の可愛い眠り姫【頬に軽くキス】

END

